



▲阿閉神社秋祭絵巻_部分



◀阿閉神社の秋祭

郷土資料館の大事な仕事のひとつに、播磨町の歴史を彩る様々な資料の収集や保管があります。本年度は、数ある資料館の収蔵品のうち、代表的なものを紹介していきます。広報はりまの掲載月にあわせ、関係資料を展示します。ぜひ本物を見に来てください。

播磨町郷土資料館 ☎079(435)5000

毎年10月を中心に、播磨の神社では、にぎやかな秋祭りが行われます。播磨の秋祭りには屋台、「ダンジリ」「タイコ」「ヤッサ」などと呼ばれる神輿のような練り物が登場し、勇壮で威勢よく担がれる様子は祭りの花形となっています。

各地の神社で行われる祭りは農作業と密接な関係があり、夏祭りは豊作を祈願し、秋祭りは収穫を感謝するものといわれています。特に秋祭りは村の中心的な行事で、屋台や神輿を練り出して盛大に祝いました。賑やかな一年のうちで数少ない娯楽の場でもあったようです。

播磨町内でも、秋祭りの行事はそれぞれの神社で行われています

が、一番の賑わいを見せるのが本荘にある阿閉神社の秋祭りです。

今回は、阿閉神社の秋祭りの様子が描かれた「阿閉神社秋祭絵巻」を紹介します。阿閉神社の秋祭りは、江戸時代の初めごろ、一時途絶えていたようですが、中ごろの享保15年(1730)に復活されたといわれています。

「阿閉神社秋祭絵巻」は高さ約26・8センチ、長さ約376・2センチの絵巻物で、描かれた年代ははっきりとしませんが、江戸時代の後期ではないかと考えられています。

先頭から先導役の後に、祭りの中心となる太鼓(布団屋台)2台・神輿・太鼓と続き、その後、鉾・幣弓・鳥毛・差し羽などを担いだ人々、その後に御検断・神主・神子(巫女・社僧など、最後尾に、庄屋・氏子など総勢109人(太鼓の陰に隠れている人は除く)が長い行列をつ

くって、御旅所のある西の海の方へ向かって進んでいきます。

現在は神社の西側は陸地となっていますが、江戸時代には海が近くまで迫っていたようで、絵巻の端には、帆掛舟が往来する海を挟んで島影が描かれています。

この絵巻には江戸時代の祭礼行列の様子が丹念に描かれていて、当時、太鼓が合わせて3台出ていたことがわかるなど、祭りの様子が詳しく描かれた数少ない資料で、江戸時代の祭礼が村をあげて、威儀を正した祭りであったことを物語っています。

郷土資料館では、この祭礼絵巻をもとに行列の様子を再現した模型を作っています。絵巻と模型を比較してみるとよく分かるでしょう。

播磨町郷土資料館 館長 井守徳男